

紀要

土偶装飾付土器の根本的性質と展開過程.....	瀬口 眞司 (1)
栗太郡の白鳳寺院研究史	宮村 誠二 (19)
蜂屋遺跡出土軒瓦を考える	福井 知樹 (24)
天武朝期における野洲地域出土須恵器の法量分化について —西河原森ノ内遺跡北半包含層を中心として—	遠藤あゆむ (28)
中世成立期の民衆の思想と信仰 —塩津起請文と卒塔婆から—	濱 修 (37)
中世集落における巻数板のあり方について —考古資料の検討から—	木下 義信 (46)
将棋史研究ノート10-2 —日本における博打と将棋の関わり その2—	三宅 弘 (53)
滋賀県行政文書で見る「近江の考古学黎明期」	田井中洋介 (63)
未就学児と歴史系ワークショップについての予察 ...	鈴木 康二 (76)

33

天武朝期における野洲地域出土須恵器の法量分化について

- 西河原森ノ内遺跡北半包含層を中心として -

遠 藤 あ ゆ む

はじめに

現在、飛鳥時代の土器編年は飛鳥地域の大量消費地から出土する膨大な資料群に基づいて編年案が示されている。西弘海氏が「飛鳥・藤原宮発掘調査報告書2」で示した編年案から四十年以上を経て、飛鳥時代の土器五期区分編年は、様々な研究者が練り上げて、非常に緻密な研究となっている。一方で、編年案が飛鳥地域という極めて特殊な環境下における編年という弱点があることは無視できない。例えば、飛鳥地域の地域としての特殊性は、土師器の調整痕からも見られる。飛鳥地域でみられる土師器杯身は内面を丁寧にナデ調整した後にミガキ調整による暗文を施し、外面も丁寧にケズリ調整やミガキ調整によって成型される。一方、他地域の土師器杯身は内面に暗文を入れることはあれど、外面にミガキ調整やケズリ調整を施していない、施している事例も飛鳥地域に比して粗雑な調整である傾向にある。

飛鳥地域でみられる土器様相は、須恵器食器と土師器食器の法量の互換性がみられ、成形も緻密で良質な土器が多い。対して、地方で使用されている須恵器食器や土師器食器は、良質な土器とは言い難い製品も多く出土し、多少歪な成型のものや、土器の胎土が砂混じりなど使用に不適と思われる土器も存在する。

このように、飛鳥地域と他地域、特に官衙的要素が見られない地域の土器様相は、おおまかには同じ様相を持つが、細かい部分に着目すれば多少の差異を持つ。つまり、飛鳥地域と他地域の土器生産において、ある程度のそれぞれの地域による特色が反映された土器生産が行われていたと考えられる。私は、器形や調整、法量分化といった手法で行われている現在の緻密な時期区分が成されている飛鳥地域の編年案を、地域の土器に当てはめる場合、地域による土器生産の様相差は無視できないものであると考える。この問題を解消するためには、地域ごとに消費地、生産地の編年案を作成し、飛鳥地域との差異を露見させ、細かく検証する必要があると考える。

本稿は天武朝期における野洲地域の消費地における土器様相を示すため、天武朝期とみられる木簡が出土し、同時期と思われる遺物が相伴している湯ノ部遺跡 SD2401、及び野洲地域の中で、いわゆる「畿内産土師器」の出土量が多い西河原森ノ内遺跡北半包含層の遺物を、今回の検討対象とする。両遺跡の報告書に記載されている土器に限って、計量的な観点から分析し、法量分化が存在の有無を検証することとする。両遺跡で行った計量的分析を、飛鳥地域での計量的分析結果と比較することで、飛鳥地域と野洲地域

の土器の法量分化の差異を抽出し、野洲地域の官衙的要素を持つと目される遺跡から出土する土器群に在地性の有無を検証したい。

1. 都城における土器研究

律令期における土器様式は「法量の規格性」「多様な器種分化」「土師器と須恵器の互換性」の三点を特徴とし、その特徴を有する土器群を「律令的土器様式」(1)と呼称する。また、七世紀後半から八世紀前半にかけては、食器類の口径が拡大し、器高が低くなる傾向を持つ。法量の規格性と器種の多様性は、宮都に近ければ近いほど多種多様な器種がみられ、宮都から離れれば離れるほど多様性を失っていく。また、より大規模な官衙的施設であればあるほど多様な器種がみられるといわれる。

2. 遺跡の概要

西河原遺跡群 西河原遺跡群は、旧中主町、現在の野州市中主に当たり、日野川の沖積作用によって形成された氾濫原及び三角州地帯にある(図1)。当地域は中世以降堆積を増し、内陸部となっているが、古代においては低湿地の様相を見せていたと考えられる。いわゆる畿内産暗文土師器が多く出土していること、硯(あるいは転用硯)の出土量の豊富さ、卓越した木簡の出土量などから、野洲地域の中で特に官衙的要素をもった遺跡群であり、野洲郡衙の推定地である小篠原遺跡と関連を持った遺跡群と想定されている。

湯ノ部遺跡 湯ノ部遺跡は西河原遺跡群南西に位置し、飛鳥時代の掘立柱建物、溝が検出された(図2)。遺構からは7世紀後半～8世紀前半にかけての土器が出土している。中でも南北方向に伸びる溝 SD2401 からは「丙子年十一月作文記」と年紀を記す文書木簡が出土している(図3)。「謹牒也」終わる養老公式令の牒式にのっとった木簡であり、676年に記されたとされる。この木簡は7世紀後半に書かれたものであるが、当木簡の内容から、長期保存を想定していると思われる。木簡が遺棄された年代は7世紀末頃であると考えられる。しかし、周辺の遺構は鍛冶工房跡と考えられ、木簡内容との関連性が薄いことから、木簡は調査区近隣で遺棄されたものが流れ着いたものであると想定されている。

SD2401 出土須恵器食器は、杯蓋、有台杯身、無台杯身、高杯である。このうち報告されている杯蓋は点数が少なく、かつ残存部位の割合が低いものが多いため、計量に適しないと判断し、今回は除外した。有台杯身は報告数が10点と

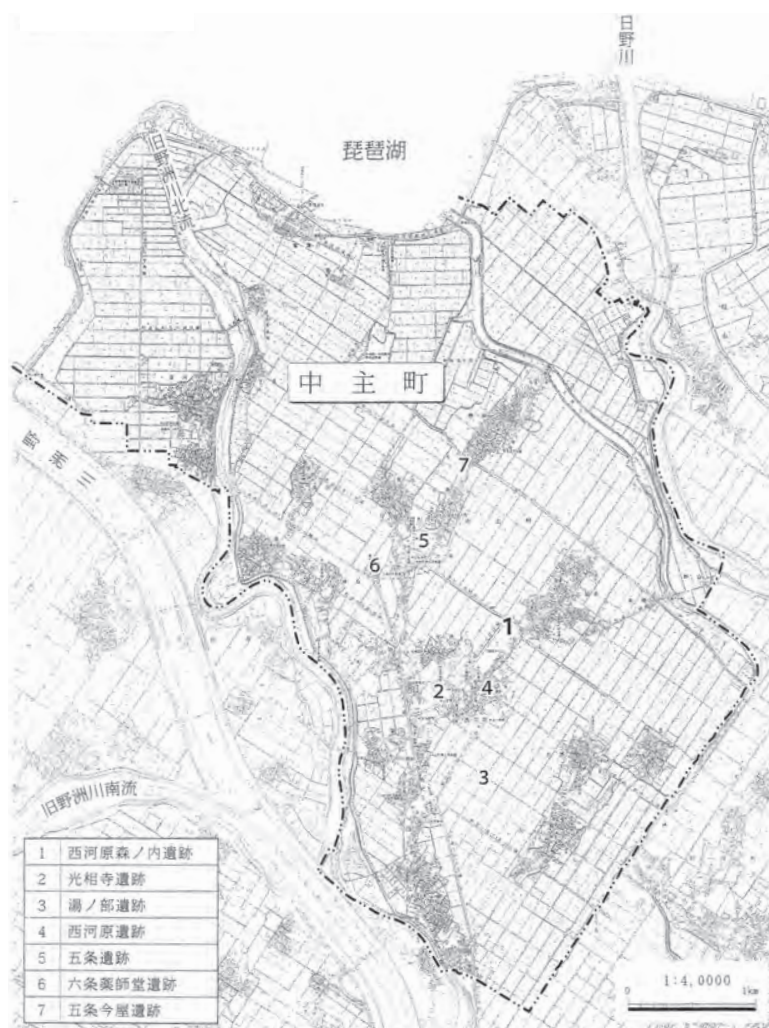


圖 1 西河原遺跡群

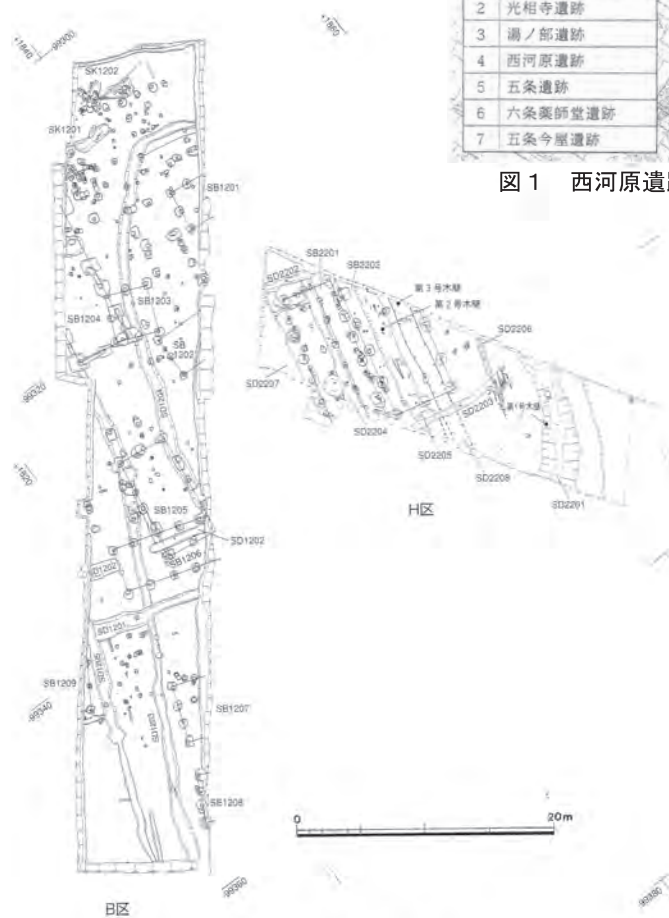


図4 西河原森ノ内遺跡B・H区平面図

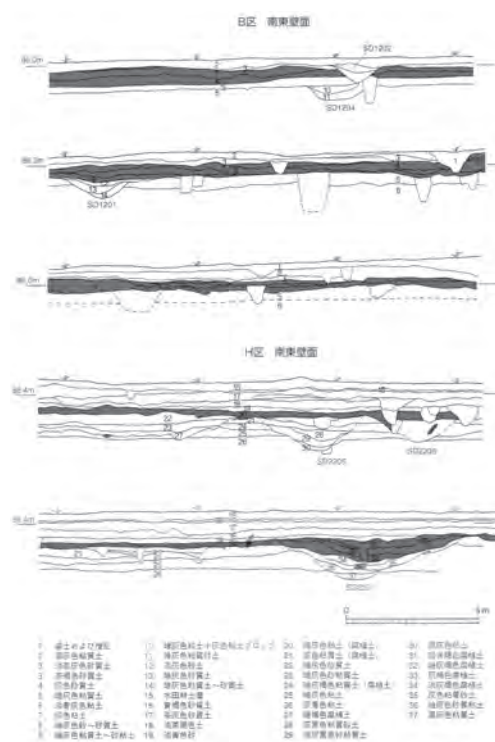


図5 西河原森ノ内遺跡壁面図
(網掛け部：遺物包含層)

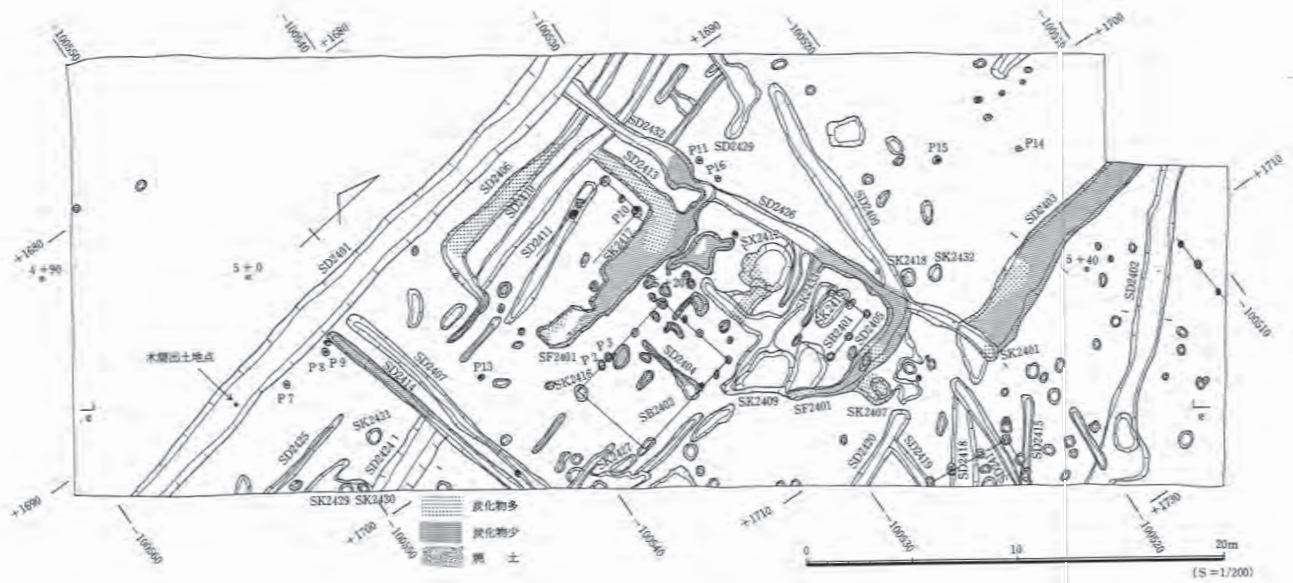


図2 湯ノ部遺跡 T24 遺構平面図

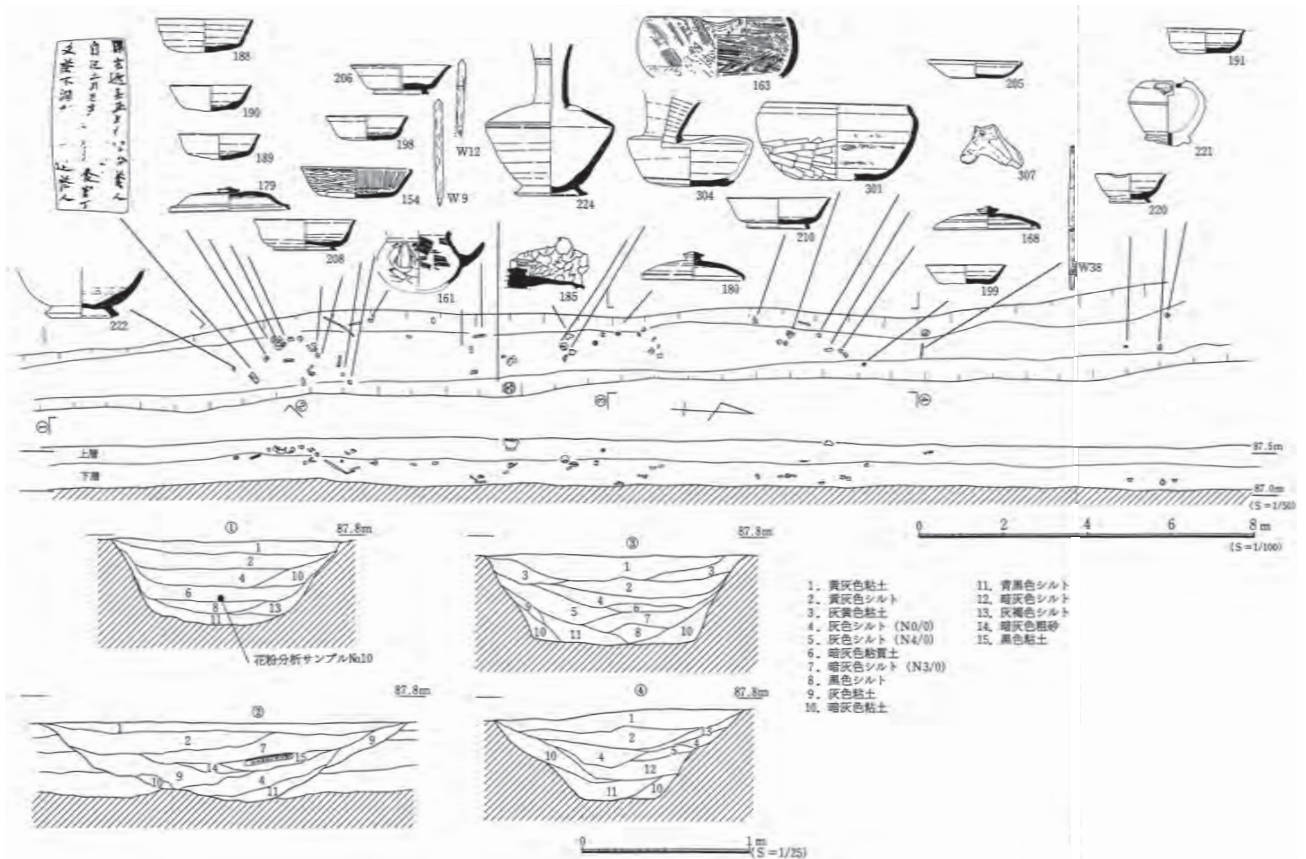


図3 湯ノ部遺跡SD2401遺構平面図・断面図

表 1 西河原森ノ内遺跡北半包含層

無台杯身 (杯A・C)



有台杯身 (杯B)

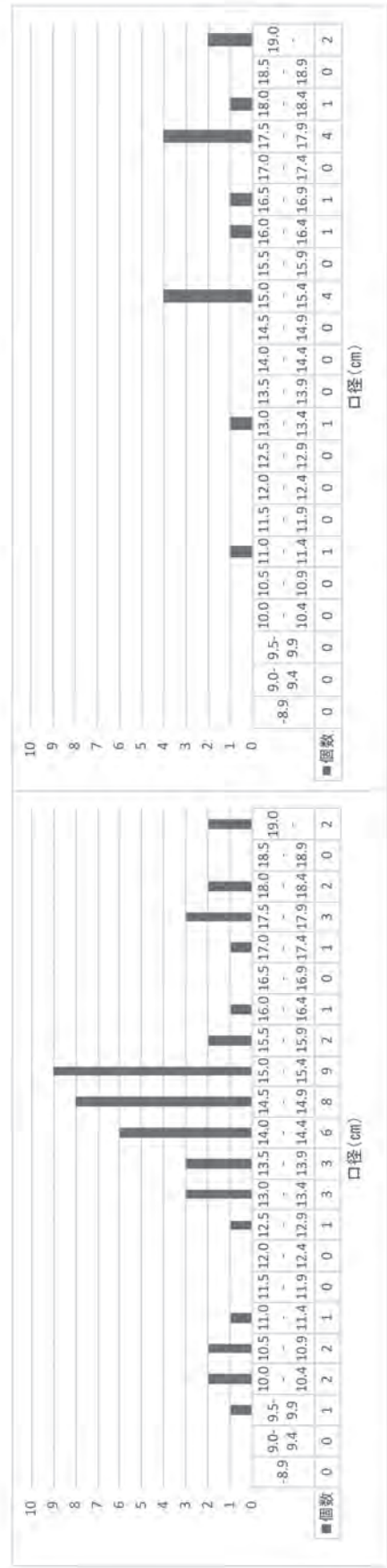
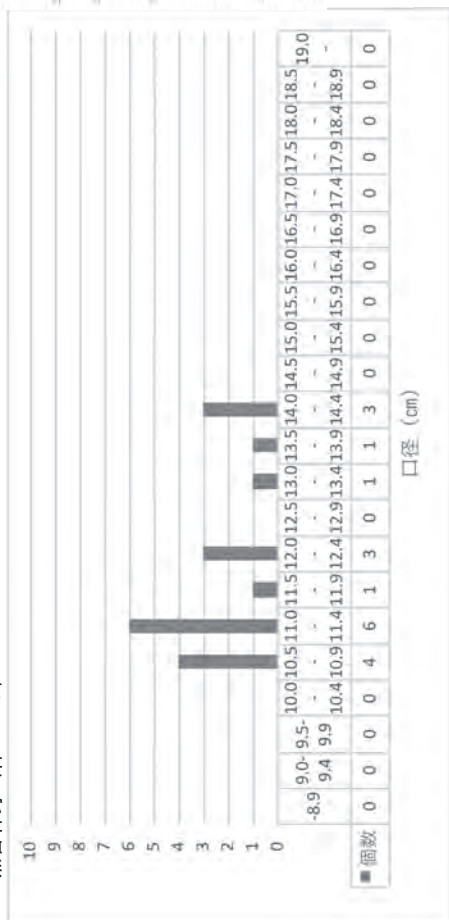


表2 湯ノ部遺跡SD2401
無台杯身 (杯A・C)



有台杯身 (杯B)

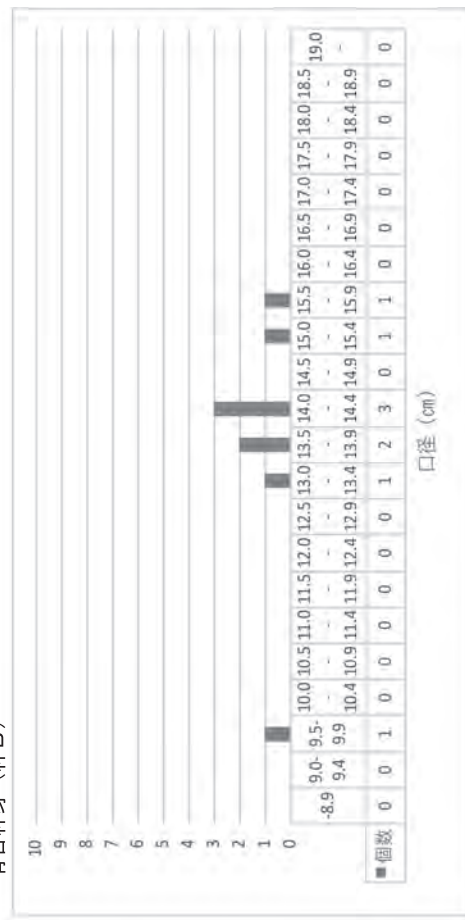
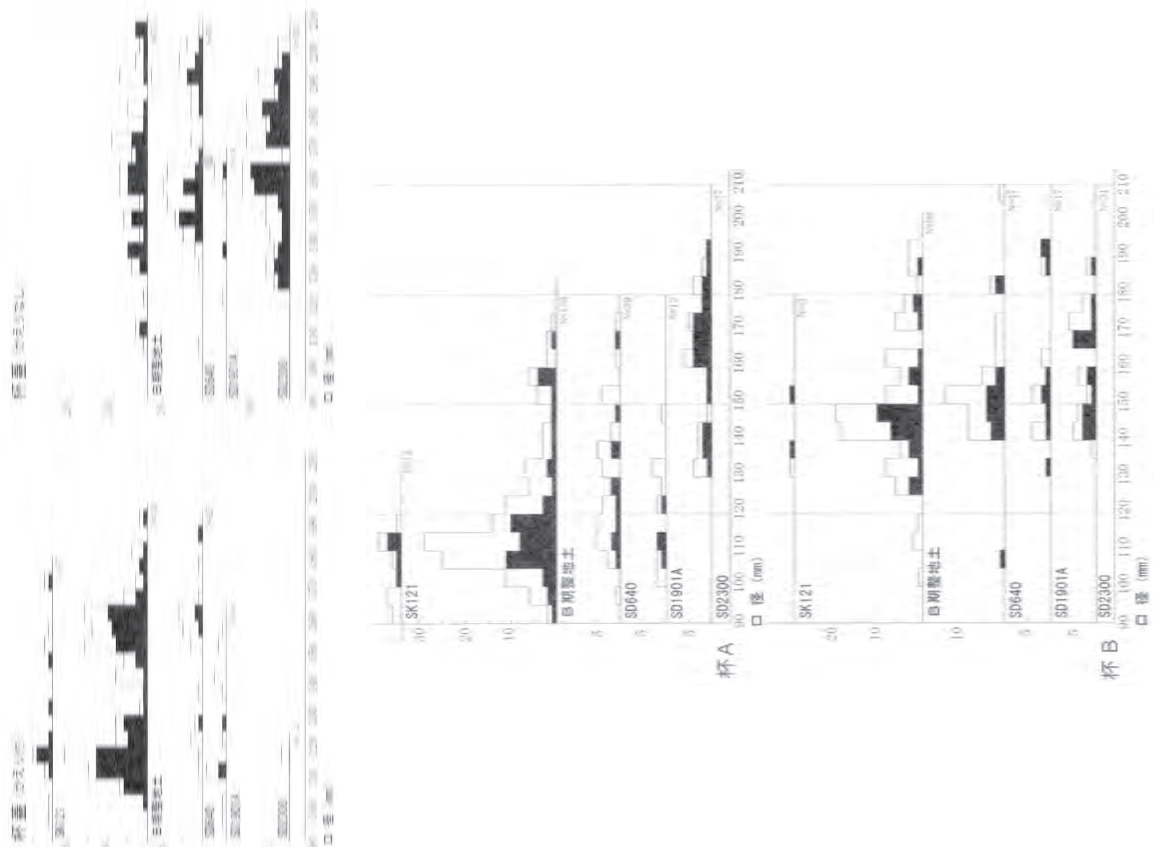


表3 飛鳥地域出土土器の口径分布



やや少ないが、比較的残存率の良いものが多い。口径は 9.5～15.9cm のものが出土しており、13.5～14.4cm にピークを持つ。無台杯身は 10.5～14.4cm のものが出土している。中でもピークは 10.5cm～11.4cm にあり、また 14.0cm～14.4cm にも小ピークがみられる（表 1）。

西河原森ノ内遺跡 西河原森ノ内遺跡は、西河原遺跡群では北部に位置する遺跡であり、遺構面は基本的に二層からなる。上層である第一層は奈良時代末期から平安時代前期の遺構面、下層である第二層は七世紀後葉から八世紀前葉にかけての遺構面が存在する（図 4）。遺跡の中でも北半は中世以降の擾乱の影響も少なく、出土遺物(2)も豊富である。木簡は 18 点確認されており、内容が確認できるものも多い。また、粃殻を含む腐植土層に多くの天武朝期とみられる土器が包含している（図 5）。同地層から見つかった第十一号木簡は、SD2205 出土の第二号木簡と内容が近似する。第二号木簡は前述の湯ノ部遺跡 SD2401 出土の第一号木簡と同時期のものであり、木簡の保存性を考えても西河原森ノ内遺跡包含層の土器は湯ノ部遺跡 SD2401 出土土器と同時期、もしくは極めて近接した時期の土器であると言えるであろう。

包含層出土の須恵器食器は、杯蓋、有台杯身、無台杯身、高杯である。杯蓋はカエリを持つものと持たないものが混在している。カエリも口縁端部から突出するものは無く、いずれも縮小されたものとなっている。カエリを持つ杯蓋の口径は 10.5～21.5cm のものまでであるが、15.0～16.0cm に点数のピークが存在する。受け部径は 14.5～15.4cm となり、同じく 14.5～15.4cm にピークを持つ有台杯身に対応するものとみられる。また、18cm を超える大型のものはカエリをもつもののみである。カエリを持たない杯蓋は、15.0～16.4cm にピークを持つ。受け部径は 14.5～16.0cm となり、有台杯身に対応するものとみられる。有台杯身は 9.8～20.8cm のものが報告されており、9.5～11.4cm に小ピークがみられるものの、14.5～15.4cm に最大のピークがみられる。無台杯身は最も報告数が多く、9.2～16.1cm までのものが報告されており、10.5～13.4cm にピークがみられる（表 2）。

3. 両遺跡出土土器の比較・検討

両遺跡の須恵器食器の口径を比較すると、無台杯身、有台杯身ともに、西河原森ノ内遺跡出土品は、湯ノ部遺跡出土品よりも口径が僅かに拡大する傾向にある。しかし、両遺跡とも無台杯身の口径は 10.0～13.0cm、有台杯身は 14.0～16.0cm に最も集中する。

次に、両遺跡の器種に着目したい。西河原森ノ内遺跡・湯ノ部遺跡 SD2401 は、須恵器食器の器種構成はほぼ差異が無く、無台杯身、蓋、有台杯身、高杯といった基本的な器種がみられる。しかし、土師器食器に関しては、両遺跡の器種構成に違いがみられる。西河原森ノ内遺跡では、無

台杯身（杯 A・C）皿（皿 A）の他に、有台杯もしくは皿とみられる器種がみられる。さらに、内面に暗文が施されるものも多い。一方で、湯ノ部遺跡 SD2401 土師器食器は暗文の施された無台杯身（杯 A）のみがみられる（図 6、図 7）。

土師質の高杯や有台杯身は飛鳥地域では宮やその周辺遺跡で多く出土する傾向にあり、宮から離れるにつれて、周辺遺跡から出土する事例は少なくなり、量も希少となる傾向にある。

土師器の器種構成については、基本的な器種のみ見られる湯ノ部遺跡 SD2401 に対して、多様な器種分化が見られる西河原森ノ内遺跡は律令的土器様式の中でもより上位の官衙的な要素を持つ遺跡と言えるであろう。

4. 考察

前項を元に、西河原森ノ内遺跡・湯ノ部遺跡と飛鳥地域出土遺物を比較することとした。

野洲地域の両遺跡出土遺物の計量的分析を見ると、無台杯身が口径 10.0～13.0cm に集中し、有台杯身が 14.0～16.0cm に集中する特徴がみられる。これらの特徴は、飛鳥地域における天武朝期（七世紀末、飛鳥Ⅳ期）とされる、石神遺跡 B 期整地土及び SD640 出土の須恵器と共通する特徴となる（図 8・9、表 3）。

よって、計量的分析から得られる結果としては、天武朝期における野洲地域の官衙的要素を強く持つ西河原森ノ内遺跡北半包含層及び湯ノ部遺跡 SD2401 出土須恵器食器は、飛鳥地域における土器様相とほぼ相違ないと想定できる。よって、法量分化の観点からは、西河原森ノ内遺跡北半包含層及び湯ノ部遺跡 SD2401 出土土器には在地性による際は見られない。

おわりに

以上のように、野洲地域内の、いわゆる「畿内産土師器」を大量消費し、多様な器種分化を有する、官衙的要素を持つ遺跡は、編年基準となっている飛鳥地域の大規模消費地から出土する須恵器食器と類似した法量分化の様相を持つという結論に至った。

しかし、今回示した結論はあくまで計量的分析による法量分化のみに焦点を置いたもので、七世紀末における野洲地域の土器様相に対して一方からのみ焦点を当てたものであることを明示しておきたい。特に、西河原森ノ内遺跡及び湯ノ部遺跡は官衙的性格を強く持った遺跡であり、官衙的性格弱い、或いは持たない野洲地域の遺跡は同時期でも異なる土器様相を持つ可能性は容易に想像できる。また、今回取り扱った資料は、報告書内に図化された土器のみ取り扱っており、新出資料による両遺跡の資料数の増加、及び統計の変化も想定される。これらの資料の追加とそれに伴う再検討の必要性に関しては今後の課題としたい。

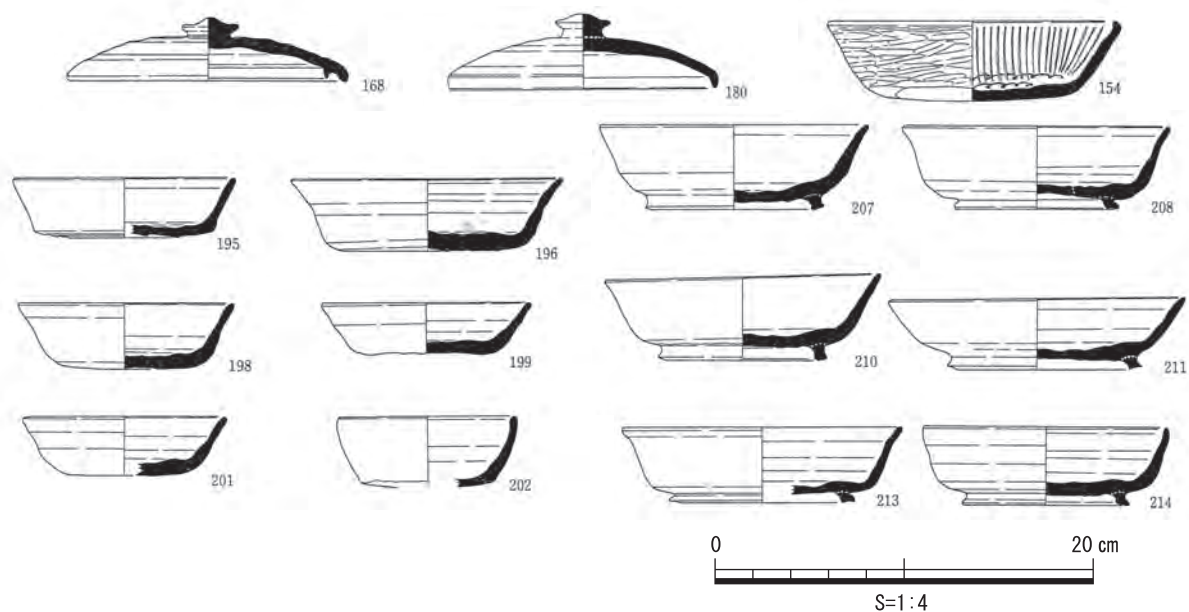


図6 湯ノ部遺跡SD2401出土食器抜粋

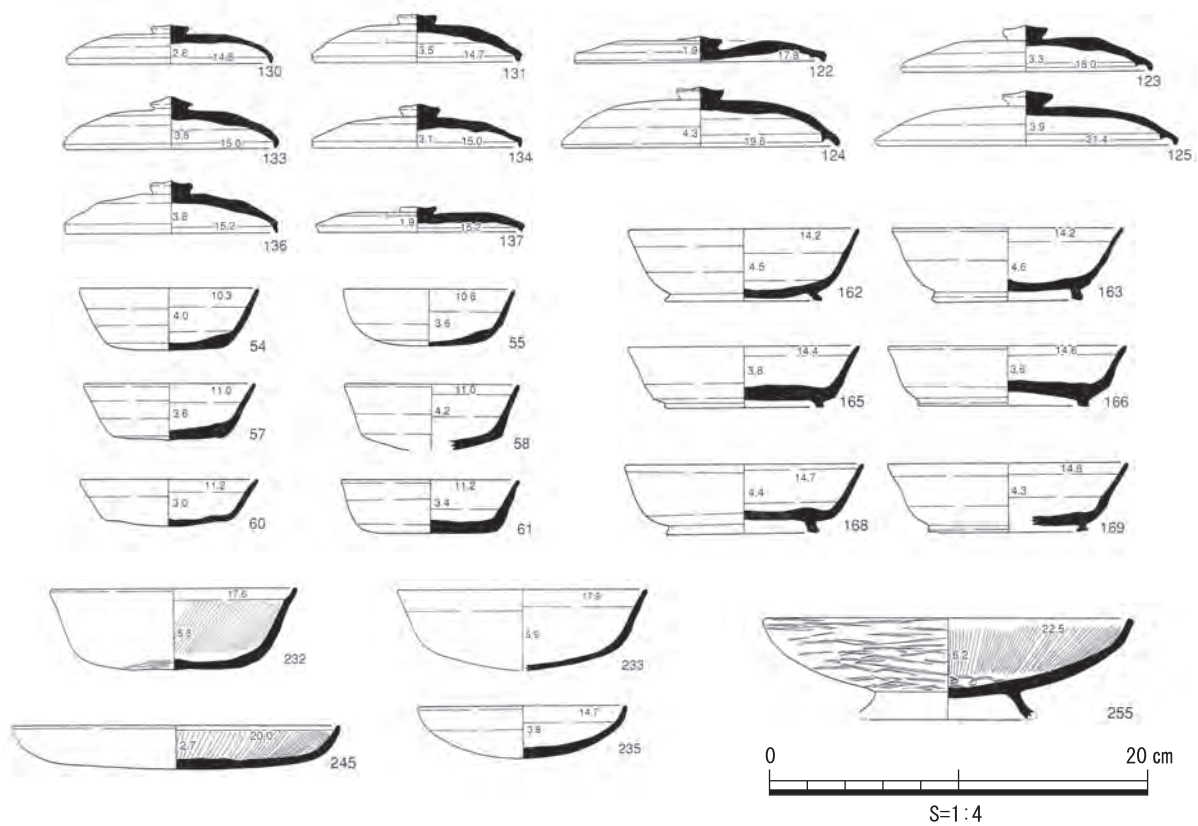


図7 西河原森ノ内遺跡北半包含層出土食器抜粋

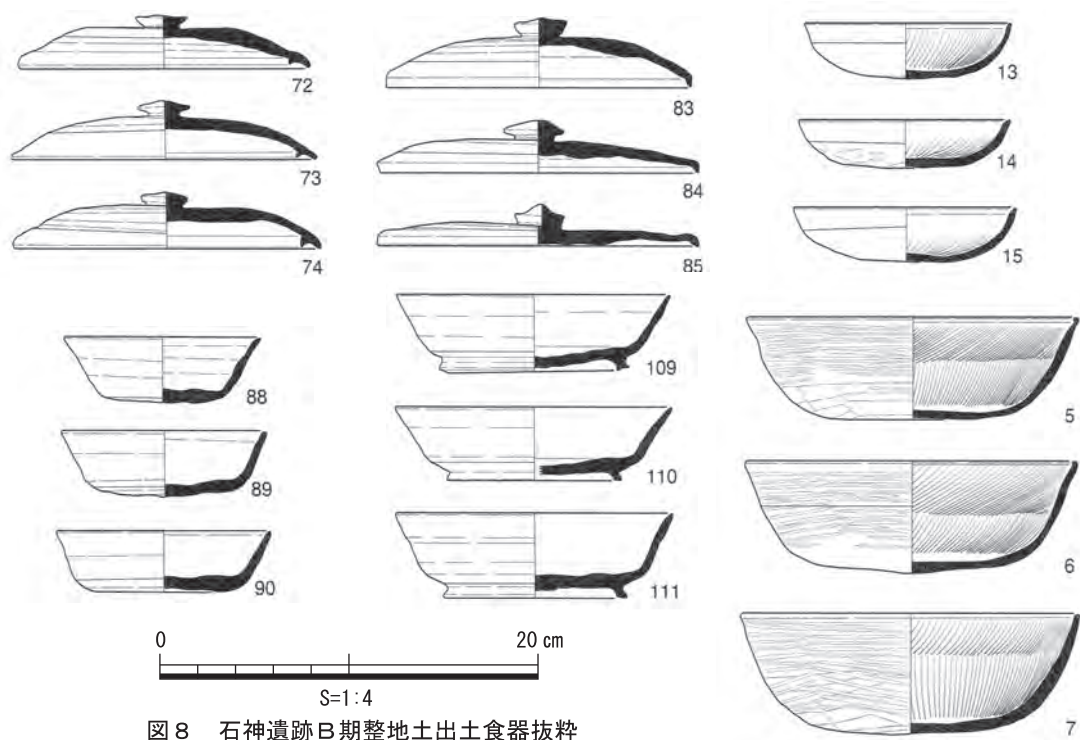


图8 石神遺跡B期整地土出土食器抜粋

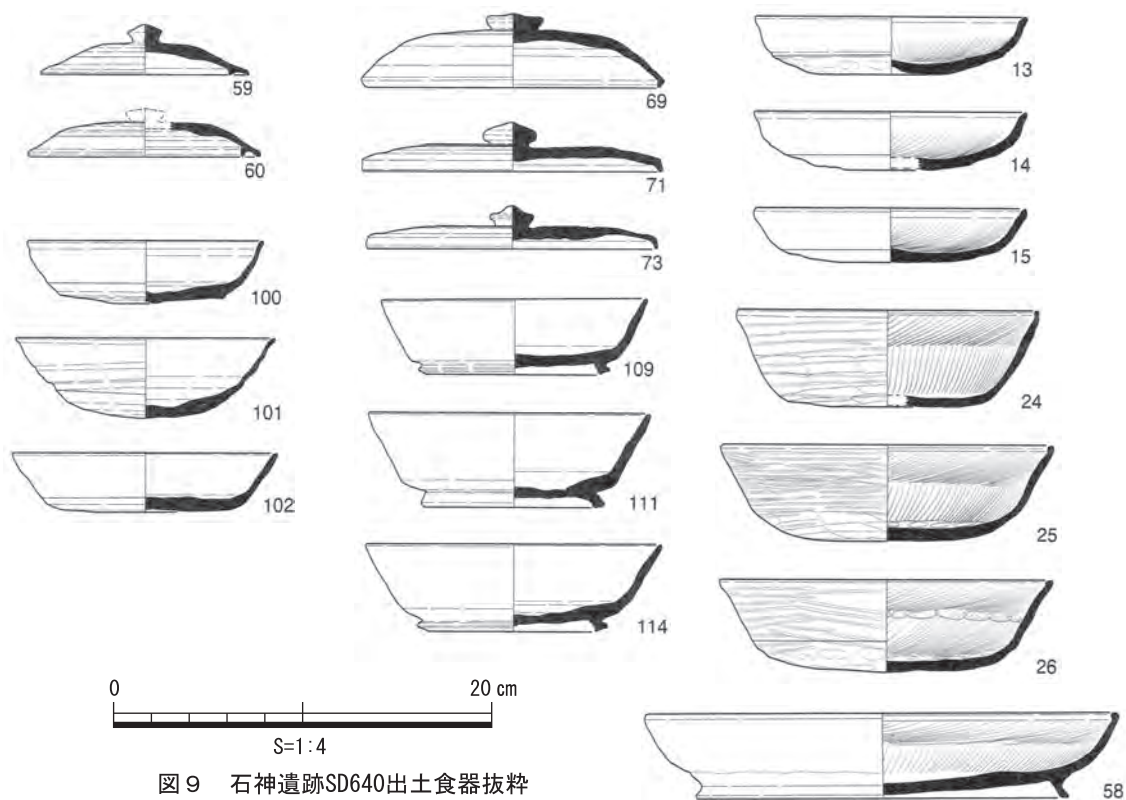


图9 石神遺跡SD640出土食器抜粋

本稿では須恵器食器についてのみ言及を行ったが、野洲地域における天武朝期の土器様相を考えるためには、両遺跡の他出土遺物、また、同時期の他遺跡出土の遺物も交えた、多角的な検討が必要である。より多くの分析結果を元に検討して、初めて野洲地域における土器様相というものを想定することが出来ると考える。本稿は、野洲地域における土器研究の蓄積の走りとし、更なる研究が必要であることを提示するものである。

地方木簡の世紀』滋賀県立安土城考古資料館
森川実・大澤正吾(2018)「石神遺跡B期整地土・SD640 出土の土器群」『紀要』奈良文化財研究所

(えんどう あゆむ：調査課 技師)

註

(1) 「律令的土器様式」という呼称が適切であるかについては研究者によって意見が分かれるところである。西弘海氏本人もその呼称の使用について「いささか奇妙な表現」としている。本稿では本論で述べた3つの特徴を有する土器群を「律令的土器様式」としている。

(2) 西河原森ノ内遺跡北半の遺物は、遺構出土の土器ではなくあくまで包含層出土の土器である。そのため、上層からの混入が考えられる。しかし、現状得られるデータの限りでは、一定の口径に資料数の偏在が見られ、天武朝期の他遺跡の口径分布とほぼ差異が見られないことから、西河原森ノ内遺跡北半包含層の出土遺物のほとんどは同包含層より出土している木簡の想定年代と同時期である七世紀末のものと想定できる。

挿図典拠

図1・2・3・7 中主町教育委員会(1990)『西河原森ノ内遺跡第1・2次発掘調査報告書Ⅰ』

図4・図5・6 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会(1997)『湯ノ部遺跡発掘調査報告書Ⅰ』

図8・9 森川実・大澤正吾(2018)「石神遺跡B期整地土・SD640 出土の土器群」『紀要』奈良文化財研究所

表3 大澤正吾「飛鳥時代における須恵器食器の法量分化」『飛鳥時代の土器編年再考』歴史土器研究会

文献 (著者名・機関名 50音順, 刊行年順)

市大樹(2008)「本文編一 西河原木簡群の世界」『古代地方木簡の世紀』滋賀県立安土城考古資料館

大澤正吾「飛鳥時代における須恵器食器の法量分化」『飛鳥時代の土器編年再考』歴史土器研究会

小田裕樹(2016)「古代宮都とその周辺の土器様相 「律令的土器様式」の再検討」『官衙・集落と土器2 宮都・官衙・集落と土器』奈良文化財研究所

尾野善裕(2019)「飛鳥時代宮都土器編年の再編に向けて―飛鳥・藤原地域を中心に―」『飛鳥時代の土器編年再考』歴史土器研究会
滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会(1997)『湯ノ部遺跡発掘調査報告書Ⅰ』

中主町教育委員会(1990)『西河原森ノ内遺跡第1・2次発掘調査報告書Ⅰ』

畑中英二(2008)「本文編二 考古学からみた西河原遺跡群」『古代

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.33 2020.3

私たちは文化財をととして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages